



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page http://www.nichiro.org

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



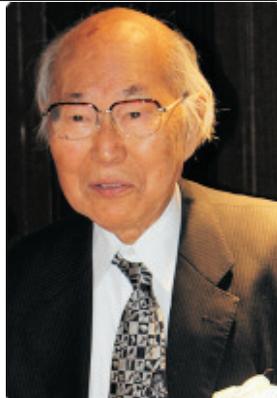
年頭にあたって

有馬 朗人

明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願ひ致します。

さて、ここ数年、日本とロシアの関係が揺れ動いておりますが、早々に友好関係が結ばれてよくなるように祈るばかりです。ロシアは芸術や文学だけでなく基礎科学や技術の分野でも優れた学者を多く輩出し、研究分野でも日本のよきパートナーとなる可能性を秘めております。

昨年は、私が所長を務めることとなりました「武蔵学園データサイエンス研究所」が設立されました。この研究所は、社会科学・人文科学の視点を持ち合わせたデータサイエンス研究の推進を目的として、人材の育成、研究・教育方法の開発推進及び社会への啓発活動を展開していきます。データサイエンスとは、データの具体的な内容ではなく、異なる内容や形式を持ったデータに共通する性質、またそれらを扱うための手法の開発に着目するものです。使用される手法は、分野としては数学や、統計学、



計算機科学、情報工学などと関係してきます。情報が多岐にわたる現在、多くの情報をどのように社会に役立てるか、分析し、検証し、未来につなげる人材を育てていく責務があると思っております。

また、外国人実習生は社会問題にもなっておりますが、日本で生活する外国人、留学生の方々への日本語の理解を深める活動も重要だと思っております。「静岡産業大学俳句コンテスト」を行っておりますが、それは、日本人学生や留学生が、総合的な日本語表現力を高め、日々さまざまな角度から日本語リテラシー（読む、書く、話す、聞く）能力の向上を目的とした教育活動の一環です。日本で生活するうえで、日本語を母語としない人たちが不利益にならない状況をつくるのも大切な事ではないかと考えます。日本政府観光局の調べでは、2018年上半期で日本を訪れる外国人数が、1500万人を突破したとの事です。その中でもロシアの伸び率は40%とふえております。2017年の日本へのビザ(査証)の発給要件の緩和によるものだと思いますが、本年も引き続きロシアからの観光客が増加すると思われます。ハバロフスクやウラジオストックー成田間は約2時間です。ますますの交流のために多面的に、またグローバルな視点で、両国の友好のために出来る事を考えていきたいと思ひます。

交流協会は政治色のない草の根の運動ですが、着実にロシアとの友好関係を築き、知日派やロシア通を増やして日口の相互理解、親善に貢献しています。日本人向けの多くのロシア語講座や講演会、文化紹介、ロシア人向けの日本語、生け花、手描き友禅講習会などは、展示会や体験会でもその日頃の成果を見ることが出来ます。バス旅行、バーベキュー、イワン・クパーラなどではロシア人との交流をはかり、相撲観戦等ロシア人のニーズに合った見学会も開催されています。

また、昨年も「ロシアにおける日本年2018」事業に参加し、日本の着物、お茶、友禅、剣術、生け花等を紹介すべく、ノボシビルスク、バルナウル、サラトフ、リャザンへ文化交流団が訪問しました。ロシアと日本の市民レベルでの文化交流が本年も活発に行われることを願っております。

皆様のご健康とご活躍を心よりお祈りいたします。(会長)

お知らせ

●新春日口交流のつどい・2019

日時：2019年1月30日(水) 18:00～20:00

会費：10,000円

*会員及び会員関係者に限ります。詳細は別紙参照。

●ロシア語クラス生徒募集中!

平日クラス月4回¥5500×3ヶ月前納。

初級2(月) 19:30-21:00、初級クラス1(水) 18:30-19:30

準中級会話(月) 18:00-19:30

上級クラス(土) 10:00-11:30、購読(第4土) 13:30-15:00

*講師の都合などで休講になることもございますので、見学をご希望の方は予め事務局までご連絡ください。

●テーマ別ロシア語第10回「映画、テレビ」続編

日時：2019年1月20日(日) 13:00～16:00

場所：交流協会事務局

費用：会員3,000円、一般4,000円

講師：オクサーナ・ピスクノワ

*好評につき、続編としてロシアの人気長寿番組「Сваты」(1回毎に完結)を見て生きた会話の勉強をします。

●第58回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2019年2月17日(日) 13:00～16:00

講師：菅野エレナ

場所：田町駅みなとパーク芝浦「リーブラ」2階造形表現室

会費：3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

●折り紙講習会

日時：2019年1月28日 18:00～20:00

講師：小倉隆子(日本折り紙協会講師)

会費：500円*会員のみに限らせていただきます。

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel : 03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座00160-9-66486、加入者：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org
*亀田慶一郎氏、山岸ひさ子氏、坂本斐子氏からご寄付頂きました。ご協力ありがとうございます。

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



運命に導かれて日本へーミハイル・モズジェチコフ氏講演会

田牧 陽一

12月8日(土)、都内でミハイル・モズジェチコフさんの講演会が開催されました。ミハイルさんは、日本に30年近く滞在し、流暢な日本語で自身の経験やロシアや日本で思った事、感じたことを話してくれました。

お話の始めの部分は、子供時代や大学時代など、今となっては昔となったソ連時代の思い出を紹介してくれました。日本では、暗い、寒い、怖いとネガティブなイメージが多いソ連時代のロシアですが、意外な事に食べ物も豊富であったとエピソードを紹介してくれました。ソ連政府は、クリスマスを宗教行事との理由で禁止しようとしたのですが、お祭り好きな人々は、クリスマスツリーを新年のツリー(ヨールカ)に変えるなどして、お祭りの伝統を残したそうです。歴史や社会の勉強にもなりました。

話のメインは日本への来日とそれからの物語です。日本語を本格的に勉強した事がソ連ではなかったようですが、当時の旧文部省の奨学金を得る機会に恵まれて、東京大学と名古屋大学で学ばれました。ロシアでの専攻を引き継ぐ形で、理系の研究を続けますが、それと同時に様々な活動を始めました。

ミハイルさん自身が「何でも屋」と説明するように、様々な映画、テレビ番組の出演やNHKロシア語講座の講師などその才能は型にとらわれず、マルチタレントのように活躍しています。日本在住のロシア人として、自らをロシアの「文化大使」



と表現するミハイルさんからは、悪いロシアの印象を少しでも良くしたいという使命感やロシア人としての誇り、気概を感じました。

その人柄も相まって、多くの日本人と親しくなりましたが、やはり母国のロシア語が恋しいという思いもあって、東京大学在学中にはロシアクラブを立ち上げて、在日ロシア人の交流、親睦にも力を入れるようになりました。

今回、話を聞いて、とても印象的だったのは、日本への来日やそのあとの経緯を名曲「川の流れるように」に例えて、流れに身を任せて気がついたら今があったという事です。日本に来たのも、そのあと日本で仕事を見つけ、家庭を築いたのも、すべては見えない力に導かれ、その流れに乗って自然に成し遂げられたと感じているそうです。

日本とロシアは多くの交流の歴史と難しい過去を背負った関係にあります。ロシア人としての誇りを持ちながら、日本への深い尊敬と愛情を持つミハイルさんのような方によって日口の民間交流が支えられていると改めて感じる事ができました。難しい問題でも笑顔を決やさず、場を和ませる力は、ミハイルさんの持つ人柄であり、それがまた今につながる運命を引き寄せた大きな力だと感じました。人と人の交流を大切に、日口の交流がより深く、強くなる事を願ってやみません。

(東海大学国際教育センター特任助教)



マトリョーシカ作品展示会開催

千葉 麻里

2018年11月5日(月)～7日(水)まで、神保町の書泉グランデ7階のイベントホールで恒例のマトリョーシカ作品展示会が開催された。日頃、田町で行われている絵付け教室の発表会として始めたもので、エレナ先生の作品販売、実演、体験を含む。今年も生徒さんたちのユニークな作品が増えて一層華やかになった。

今回は、似顔絵アーティストの田畑伴和氏も一日だけ友情参加してくださり、ファンが訪れて足を止めてくれたので賑やかだった。できれば生徒さんたち皆さんにも来てもらいたかったが、平日のことでなかなか難しい。

書泉グランデの担当者が変わったが、以前の担当の平井さんが気にして度々様子を見に来てくれた。秋葉原店に異動になったということだ。そちらも駅前足元の便がいいので、来年度は秋葉原でも開催しよう、という話が出た。神保町よりも比較的若者の多い秋葉原は、また来店者層が違うので生徒数を増やすためにはいいかもしれない。神保町店の6階は鉄道マニアが集まるので、7階まで上がってくるお客さんが必ずしも多くないのだ。

田畑氏だけでなく、エレナ先生のファンも多い。横浜のほうからもわざわざ足を延ばして見に来てくれる。体験をしていく方も何人かいらした。小さいものはマグネット、ブローチから、短時間で体験できるので人気がある。

今年の訪問客の中に、真島正さんという、近所にアトリエを持つ達磨作家がいる。マトリョーシカとの共通点が多く、たいへん興味をもたれて、12月のマトリョーシカ絵付け教室にもみえられた。「マトリョーシカの方が細かい作業が多く、いくらでも凝ることができるので時間がかかりますね」という感想だった。次回の展示会は、達磨とコラボレーションすることも考えている。

エレナ先生の穏やかな人柄もあり、人の輪が広がっていく。広いスペースの展示会場を生かして色々な作家の作品が並ぶと、楽しい芸術空間になりそうだ。私も芸術や創芸に関係する知人がいてよく数人で展示しているのを見に行くことがあるが、見るほうも楽しいものだ。生徒さんたちの作品もレベルアップしており、個性が感じられて勉強になる。お互いが刺激になって、教室も充実してきたと思えるこの頃である。

(常任理事)



● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



餅つきハイキングに参加して

ピエール・アントン・カプフェル

最近山登りする機会が少く、「武蔵横手駅」のような東京から遠い所まで行く機会もなかなかないので、土曜日の餅つき体験は非常に印象に残ると思い参加してみました。西武線電車の窓からも田舎の景色が素晴らしく、電車から降りるとコンビニエンスストアさえない場所にいることに感動しました。来日してから都内から郊外へ出たことなかった私にとって、コンビニエンスストアや店が全くなく、車がなければ生活出来ないような所に来てみて母国フランスの実家が懐かしく思われて来ました。私の実家は武蔵横手のような田舎なので実家に帰ったような気がして嬉しさを感じました。

続いて山登りもとても快適でした。日本に来て最後に山を登ったのは2年前の高尾山だったので2年ぶりの山登りでしたので少し疲れてしまいましたが、楽しい経験でした。上がり坂には厳しい所がありましたが汗をかくこともなく目的の山荘に着くことが出来ました。家が2-3軒ぐらいいしか見当たらないこの山村に気持ちの安らぎを覚えました。世界最大都市の東京から電車で2時間以内にこういった100年前の姿をそのまま残すところがあることに、古い良き日本を感じる事が出来たのも大きな収穫でした。又家も古い作りで、知人が、現在ではこういう家を建てられることはもう見当たらない



ニコライ・バンドゥラ その2

- ハバロフスク放送局初代日本語課長を務めた
バンドゥラは1970年代ソ連の札幌総領事だった -

島田 顕

前回、モスクワ放送ハバロフスク放送局日本語課の初代課長であるニコライ・バンドゥラについて書かせていただいたところ、函館在住のKさんから反応が寄せられた。感謝。Kさんによればバンドゥラは1970年代の札幌総領事ではないかということだった。Kさんが示していたロシア大使館HP日本語版を早速調べたが、簡単な経歴しかなく、ラジオ関連の経歴もなかった。ところが同HPロシア語版を見ると、経歴については同じだが、父称がイヴァノヴィッチであることがわかった。

このことをたよりに、ダメ元でロシア語の検索にかけたところ、ロシア語ウィキペディアがヒットした。さらにロシア語ウィキペディアが参考文献に挙げていた「不死身の連隊」というHPにラジオ関連の経歴があった。これにより札幌総領事のバンドゥラと、ハバロフスク放送局初代日本語課長のバンドゥラが同一人物であることが確認できた。

以下、二つのHPの情報をまとめた。1914年12月15日ニコラエフ市[現ウクライナ共和国]生まれ、2005年2月23日没[享年90歳]。実の両親がドニエプル川で溺死、4歳で孤児院に入れられた。実の兄弟[兄弟か解らず]も孤児院に入ったが以後行方不明となり、彼はこの兄弟を生涯を通して捜していたという。その後ニコライ・セミョーノヴィッチ将軍の目にとまり、彼はこの将軍の養子として育てられた。内戦期、連隊の息子[軍属の少年達のこと]だった。1926年にニコラエフ市で赤軍に



いと言って、やはりフランスであれ日本であれ伝統的な文化や家の建築方法が消えてなくなっていくような思いにかられ、私たちの世代は昔の良き伝統や風習を守っていくミッションがあると考えました。

この日までは餅がご飯と同じく米で作られていることも知らなかったほどの初心者でした。餅作りの勉強をゼロからスタートしました。思ったより作り方は簡単だったのですが意外と力を入れないと、つきませんでした。以前ネットで餅作りの動画を見ましたけど実際にやってみると予想以上に楽しくていい経験でした。餅作りは自分のためだけではなく、誰かがとても苦労しながらついていると、皆さんすぐに助けに入り、お互い協力しながら餅をつく共同作業はとても良い雰囲気でした。出来上がった餅に合わせて豚汁を飲んでみました。豚汁の味はお母さんが作ってくれたフランス料理にあるスープと似ていてとても懐かしい味でした。

日口交流のイベントでありながら残念なことにロシア人は欠席者が出てただ一人の参加だったためか、みなさんがフランス人である私に声をかけて優しくしてくれました。この活動は私にとって日口ではなく日仏交流会になって日本人と友達になり、餅作りを体験して日本の伝統文化をもっと深く分かるようになってこの活動に参加された皆さんと、これを主催された協会の皆様に感謝します。(学習院大学留学生)



入隊。戦前まで、ザバイカル戦線政治部第7部通訳養成初等過程で大きな成果を成し遂げた。大祖国戦争の全期間を軍で過ごした。戦争勃発時、彼と家族はモスクワに避難した。1942年に西部戦線に派遣されるが、3-4か月で戦線より戻った。その後独ソ戦争に日本が参戦することを危惧したソ連政府により、極東に派遣された。この時彼の家族はチタにいた。後にハバロフスクに戻り、日本人捕虜とともに活動、日本向けラジオ放送の責任編集者をつとめた。陸軍大佐[最終階級]。高等教育を受け、日本語を習得した[時期、機関名等は不明]。戦後ブレジネフの技術秘書となった[時期等は不明]。1969年から1973年まで在札幌ソ連総領事。1973年6月5日から1976年1月15日までモーリシャス[インド洋上の島々からなる共和国]のソ連全権大使。1976年に退任[61歳]。

それにしても、バンドゥラとハバロフスク放送局時代にアナウンサー・編集者をつとめた木村慶一は、1970年代初頭とともに札幌にいたことになる。だが、二人が旧交を温めることはおそらくなかったにちがいない。冷戦下でソ連の外交官と日本の一般市民が非公式に交わりをもつことはまずありえなかったからだ。

バンドゥラのことを調べるにつれ、彼のことがもっと知りたくなった。札幌での活動、退任後から死去までの約30年間の活動についても。さらに彼と同じく日本関連の活動をしていたという息子や家族についても。手立てはありそうな気がする。俄然やる気がわいてきた。

《モスクワ・アラカルト51》

ウラー！ついに「ソ連歌謡本」出版へ

日向寺 康雄

平成最後の年の瀬に、実に興味深い本が出た。「ソ連歌謡 共産主義下の大衆音楽」(蒲生昌明著・パブリブ)だ。この勇気ある出版社は、おとしすで「共産テクノ ソ連編」というこれまたユニークな本を出し、熱烈な音楽ファンや共産主義者ならぬ「共産趣味者」を自称する若者達に注目され支持された。ソ連という体制と社会の中で生まれ、独自の進化を遂げたテクノ音楽は、西側のそれとは自ずと異なった独特の雰囲気と魅力に満ちている。蒲生さんは、今回本を出したきっかけについて、次のように話してくれた。「テクノ本の著者を迎えたイベントに参加したのだが、大変盛況で若い世代の参加者も多かった。私は、そうした人達に、まだまだ知られていないソ連時代の音楽や文化の魅力を知ってもらいたかった。テクノ限定ではなくロックや歌謡曲等、ソ連でどんな歌が歌われ、聞かれていたのかをコンパクトにまとめた本があって然るべきと思った。」実は蒲生さんは、私が働いていた「モスクワ放送」及び「ロシアの声」のありがたいウルトラ(?)リスナーだった。高校生の時、自宅のラジオに偶然入感したのがきっかけで放送を聴き始め、ソ連が崩壊した後も、短波中波放送が中止されインターネット放送だけになってからも変わらず見捨てず、何と45年にわたり聴き続け、私達を励まして下さった。特に音楽番組「ミッドナイト・イン・モスクー」や「モスクワミュージックマガジン」の常連で、リクエスト



ばかりでなく中身の濃い、音楽愛に溢れた感想をしばしば寄せて下さった。そんな彼が書いた本が、面白くないわけがない！氏は、自著の特色について「ソ連の音楽といえばクラシック、民謡、うたごえという先入観に真正面から挑み、いろんな種類の音楽がソ連にあった事実を取り上げている点だ。そして、映画音楽を通して日本では未知のソ連のコメディも紹介し、また、ロシア以外の国や民族、イスラム圏の音楽も取り上げた。これに私自身のソ連での見聞やモスクワ放送を聴取した話も随所に散りばめたので、単なる資料ではなく、今はなきソ連という国の生き生きとした空気の一部を知ることができると思う」と語っている。

ソ連邦崩壊から早27年。音声放送が終了し、私が一身上の理由で日本に戻って1年半。日ソ日ロの架け橋になりたいと願って自分が30年関わった仕事、この素晴らしい本が世に出る助けになったのだとしたら、これほど嬉しく光栄な事はない。なぜなら「鉄のカーテンの向こう側に住む人々も、愛すべき同じ人間であり、同じように喜怒哀楽を感じ、平和と幸せを願っている。普通の生活者同士はきっと分かり合える」-そう伝え続ける事が最大の使命だと私は信じてきたからだ。その意味で、今この時期こうした形で、他ならぬソ連の大衆歌謡が紹介されるのは意義深い。プガチョワではないが、オーチン・ハラショー！と叫びたい。

(モスクワ放送元チーフアナ・現在大学非常勤講師)



リャザンへようこそ！(1)

土井 法子

みなさん、「リャザン」という市をご存知でしょうか。リャザン市はモスクワから南東に約260km、電車やバスで約2～3時間のところに位置します。人口は約50万人(2010年の調査では上位32位)でリャザン州の中心にあります。日本人にはあまり知られていないですが、ロシアの詩人で有名なセルゲイ・エセーニンやパブロフの犬(条件反射)で有名なイワン・パブロフが生まれた場所でもあります。モスクワに比べて都市の規模は小さいですが、自然が豊かで比較的物価が安いことからモスクワに住む人々の行楽地になっています。

さて、私は今このリャザン市にあるリャザン大学(正式名称はセルゲイ・エセーニン記念リャザン国立大学)で日本語教師として働いています。今回は、ガイドブックには載っていないリャザンの町や日本語教育の様子についてご紹介させていただきたいと思います。

【リャザンはどんなところ？】

モスクワの近郊には歴史の古い町が多く、リャザンも11世紀ごろできたと言われる古い町です。中心部には観光地としても有名なクレムリンがあります。クレムリンの中にはいくつかの教会があり、その中でも一番大きいのはウスペンスキー寺院です。水色で美しいドームを持ち、遠くからでもその存在がわかるほどです。クレムリン内には民族博物館もあり、衣食住についての展示を見ながらロシアの人々の暮らしを学ぶことができます。また、クレムリンのすぐ横にはオカ川の

支流があり、夏には小さなクルーズ船で川下りを楽しむこともできます。市内の観光地として他にも有名なのはイワン・パブロフの博物館です。ここにはパブロフの研究や彼の生涯についての展示がいくつかあります。また、リャザンの郊外で、町から北へ約30キロ、オカ川に面したところにコンスタンチノボとよばれる場所があります。ここはロシアの詩人セルゲイ・エセーニンが生まれた場所で、今は博物館になっています。セルゲイ・エセーニンは自然をモチーフに愛や人生についての詩を多く詠み、20世紀のロシアで最も有名な詩人のひとりとしており、今でも彼の詩は学校などで学ばれています。

リャザンはモスクワと違い、都市としての華やかさは少ないかもしれませんが、町の誰もがリャザンは自然が美しいと言うほど、町のすぐ近くに自然があふれている場所です。気候ははっきりとしており、5月から爽やかな夏がはじまり、10月下旬から11月にかけては初雪がみられます。12月～3月にかけては冬真っ只中で氷点下10度を下回る日が続きます。4月には雪解けで町中には水たまりが多くなります。また、四季に合わせて、冬にはスケート、夏にはバーベキュー、秋にはキノコ狩りとリャザンの人々は季節に合わせて自然を楽しみます。(キノコといえば、リャザン大学の近くには“目のあるキノコ像”がある公園があります。)また、生活するのにはとても便利な場所で、市内の交通はマルシュルートカ(乗り合いバス)やトロリーバスが走っており、町のいたるところにスーパーがあります。(リャザン国立大学日本語教師(参考)リャザン大学日本語学科FBページ<https://ja-jp.facebook.com/ryazan.jp/>)